ネットワークを利用した交流学習の影響

—美里中学校との交流を通して—

The effect of intercourse making use of network

小　栗　　信（和歌山大学教育学部附属養護学校）
Makoto OGURI

特殊教育諸学校にもコンピュータやインターネットが導入され，児童生徒の授業や交流学習においても利用されている。本研究は，障害児と健常児の交流において，事前交流として行ったネットワーク交流が，健常児の障害児に対する意識や態度の形成についてどのような影響を及ぼしたかを，ネットワーク交流前と交流後に行った意識調査と感想より考察を試みたものである。

キーワード：交流，インターネット，ネットワーク，TV会議

1．はじめに

一般小中学校はもとより，特殊教育諸学校においても児童生徒用コンピュータが設置，インターネットに接続される学校（ホームページ開設182校，「インターネットと教育」より）が増えており，インターネットを利用した教育実践も多く試みられている。

その中でも，100校プロジェクトの福井大学教育学部附属養護学校，大阪教育大学附属養護学校，滋賀大学教育学部附属養護学校を中心とした養護学校間ネットワークプロジェクト「チャレンジキッズ」等では，電子メール，ＢＢＳ（電子掲示板），ホームページ，TV会議等を利用して，他養護学校，特殊学級児童生徒と交流をしている。

交流学習に関して，今回の指導要領での改訂は，中学校を例にとると，第１章総則　第６指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項が，「地域や学校の実態に応じ，家庭や地域社会との連携を深めるとともに，学校相互の連携や交流を図ることにも努める。」から「開かれた学校づくりを進めるため，地域や学校の実態等に応じ，家庭や地域の人々の協力を得るなど家庭や地域社会との連携を深めること。また，中学校間や小学校，高等学校，盲学校，聾学校及び養護学校などとの間の連携や交流を図るとともに，障害のある幼児児童生徒や高齢者などとの交流の機会を設けること。」と改訂されており，養護学校児童生徒との交流を推進している。

上記の指導要領の改訂，学校におけるインターネットインフラ充実を受けて，一般学校と養護学校との交流学習，その事前事後の学習において，今後ネットワークを利用した交流が増えていくことと予想される。

本校は平成８年４月より公衆電話回線によるインターネット接続，平成10年２月よりINS 64デジタル公衆回線が導入され，従来の交流活動に加えてネットワークを利用した交流学習を実践している。

現在までに，東京光明養護学校，滋賀大学教育学部附属養護学校，たちばな養護学校，附属中学校等と電子メール，ＢＢＳ，ホームページ，TV会議等での交流を行ってきた。

美里中学校との交流は18年の歴史を持ち，実践センターのプロジェクトの協力を得てのネットワークを利用した事前事後交流は３年目を迎えている。

２．研究の目的

交流学習，統合学習における，健常児の障害児に対する意識や態度は，これまでにいくつか研究されてきており，接触の経験や知識の吸収によって，障害児に対する健常児の意識や態度が受容的，好意的な方向へ変化していくという結果を述べている。（伊藤隆二・田川元康1967，遠藤真・山口洋史1969，田川元康・由良妙子1992）

本研究は，間接的な接触交流であるネットワーク交流（今回使用した交流方法はホームページとTV会議）における，健常児の障害児に対する意識や態度の形成について，次の点について検討したい。

◎障害児に対する態度の形成に及ぼすネットワーク交流学習の影響。

○ネットワーク交流が障害児理解に役だったか。

○ネットワーク交流が実際交流における有効な事前交流となりえたか。

○交流学習におけるTV会議の効用の考察。

３．研究の方法

(1) 対象生徒

美里町立美里中学校１年生を対象とする

美里中学校１年生（男子15名，女子15名，計30名）

＜欠席＞交流前アンケート時　（男子１名，女子２名）

ネットワーク交流後アンケート時（男子１名，女子１名）

実際交流後アンケート時　（男子１名，女子１名）

(2) 調査方法

［意識調査］

一般態度の構成要素とされている認知的・感情的・行動的側面をはかるために由良妙子（1991）が作成した測定項目を一部変更し使用した。

障害児に対する認知的・感情的態度に関する13項目を用いて「思う」「どちらともいえない」「思わない」，障害児に対する行動的態度５項目を用いて「できる」「わからない」「できない」の３件法で回答を求め，３～１点を与えて得点化した。

項目の内容は Table１，Table２の通りである。

上記の調査を交流前，ネットワーク交流後，実際交流後の３回行った。

交流前に欠席した生徒の意識調査は，ネットワーク交流後の調査も計算時得点に入れなかった。また他２名の欠席者は，すべての調査時に欠席していた。

［感　　想］

交流前・ネットワーク交流後・実際交流後に，自由記述式の感想文を求めた。

なお，生徒に付けられている番号は，本研究者が整理を目的として付けた番号であり，調査の結果から引き出した順位や出席番号ではないことを明示しておく。

Table 1　障害児に対する認知的・感情的態度の項目

No.	項　　目
1.	養護学校の友達と、自分から進んでかかわり合いたいと思う。
2.	養護学校の友達と、喜びや楽しみを分かち合うことができる。
3.	養護学校の友達のことを自分の友達であると思う。
4.	障害について書いてある本を読んだり、テレビを見たりしてみたいと思う。
5.	養護学校の友達の学校を見学したいと思う。
6.	養護学校の友達に、気軽に話しかけに来て欲しいと思う。
7.	養護学校の友達は、一人では買い物をしたり、電車に乗ったりできると思う。
8.	養護学校の友達もわからないことがあれば、もっと私たちにたずねるべきだと思う。
9.	養護学校の友達は、助けがいるときには、もっと私たちに頼みに来たらいいと思う。
10.	養護学校の友達といっしょに集まれる場所や時間を作るべきだと思う。
11.	養護学校の友達を助けてあげたいと思う。
12.	養護学校の友達と一緒に遊びたいと思う。
13.	養護学校の友達に、私の家に遊びに来て欲しいと思う。

Table 2　障害児に対する行動的態度の項目

No.	項　　目
1.	養護学校の友達と学校に一緒に行ったり、帰ったりできますか。
2.	養護学校の友達とお弁当を食べるとき、手伝ってあげることができますか。
3.	体育の時間のとき、養護学校の友達が、体操服に着替えるのを手伝ってあげることができますか。
4.	養護学校の友達が、鉛筆や消しゴムを忘れてきたら、貸してあげることができますか。
5.	養護学校の友達と休憩時間にいっしょに遊ぶことができますか。

4．結　　果

(1)　意識調査より

Table 3　障害児に対する認知的・感情的態度・行動的態度の平均（SD）

	交流前	ネットワーク交流後
認知的感情的態度	29.30 (4.18)	31.37 (4.26)
行動的態度	11.85 (2.33)	12.30 (2.01)

(2) 感想より

	ネットワーク交流後の感想
1	欠席
2	コンピュータの時はどんな子かはっきりわからなかった。
3	TV 会議でインターネットを通して会話ができておもしろかった。
4	養護学校の友達と話したり歌を聴いて楽しかった。
5	TV 会議ができてよかった。
6	あまり交流をしたくなかった。どうしてかと言うと殴られたりしたらいやだから。
7	歌を歌ったり質問をしたりしてとても楽しかった。
8	会ったといってもTVだったので少しこわかった。
9	コンピュータを使って養護学校の人たちと話ができてすごいと思った。
10	少し心配だった。
11	いきなり本番にあってきんちょうするより、最初にあって少し話た方がよかった
12	にぎやかで元気だと思った。
13	もっと不自由なのかと思っていたけれど自分で動いたり、しゃべったりできると分かった。
14	少し恥ずかしかったけどTV会議をしたから、本番会いやすいと思った。
15	あまり関心がなかった。少しびびってた。
16	始めは写真を見ただけだったのでどういう感じ（雰囲気）の人か分からなかったけど何となく分かってうれしかった。
17	どの子が誰かわかりにくかったけど歌を歌ってもらったり、歌を歌ったりして楽しかった。クイズをしてもらう時間がなかったのが残念だった。
18	きちんと話ができるか心配だった。でも、TV 会議をしてみんな明るくてたのしそうな子だった。それだったら自分から話しかけられると思った。
19	TV 会議をする前から私は楽しみにしていました。TV 会議が終わるとすごく楽かったので早く会いたいなあ、と思いました。
20	歌を大きな声で歌ってくれてうれしかった。
21	すごくのりのよい人もいたけど少し静かだった。私にインターネットをしようと言ってくれてうれしかった。
22	みんな私が思っていた感じとちがってみんな明るい子だった。
23	欠席
24	はじめはみんなどんな子なんだろうと心配だった。質問に答えてくれるか不安だった。実際やって歌も上手だったし、私はとても楽しかった。ゲートゴルフが楽しみになった。
25	少しきんちょうしてしまったけれどうまく言ったと思った。
26	はやくあってみたいと思った。
27	言葉もはっきりしている子が多かった。しゅみも「今の子ども」ぽいことで少し安心した。
28	TV 会議ではみんなのことがよく分からなかった。
29	交流して会うのが不安だっ心配だった。うまく対応できるか心配だった。
30	テレビに自分がうつる時はずかしかったけど養護学校のみんながとても元気ではずかしがっていなかったから私も後からはずかしくなくなった。

5. 考　察

(1) 意識調査より

平均値から,「障害児に対する認知的・感情的態度」,「障害児に対する行動的態度」共に受容的態度得点は，交流前よりネットワーク交流後の方が高くなっている。

次回の研究で因子分析及び統計的処理をおこない要因についての分析を試みたい。

(2) 感想より

TV会議の感想より本研究者が注目したのは，「TV会議で交流をしたことで，障害児と交流することの不安が解消された生徒グループ（A群：11，13，14，16，17，18，22，24，27）と「TV会議では障害児と交流することの不安が解消されなかった生徒のグループ」（B群：2，6，8，10，15，28，19）があったことである。

A群の生徒が交流前に養護学校の生徒に対して，「もっと不自由」「しゃっべったりできない」(13)，「どういう感じか分からない」(16)，「きちんと話ができるかどうか」(18)，「暗い」(22)，「質問に答えてくれるか不安」(24) という抱いていたイメージは，お互いに話すことができたり，お互いの姿や動きが伝わるTV会議を通して，「動いたり，しゃべったりできることが分かった」(13)，「何となく分かった」(16)，「明るくて楽しそう。話しかけられる」(18)，「明るい子だった」(22)，「楽しみになった」(24) と変化してきている。これは，TV会議の持つ音声・映像を同時に相互，即時に伝えることができる特性の効果だと推測することができる。

B群の生徒がTV会議を介しても「殴られたりしたらいや」(6)，「少し怖かった」(8)，「びびっていた」(15)，「よく分からなかった」(28)，「うまく対応できるかどうか」(29) といった不安が残ったのは，TV会議では直接接触の経験を補えなかったためだと推測した。

本研究者は，以前の研究（実践センター紀要No.7，チャレンジキッズダイジェスト'97）で「障害児の」もしくは「障害児との」バーチャル交流（インターネットだけでなく，手紙等のやりとりにおいても）は「必ず実際に会う」ということをどこかに（事前事後）に入れなければ，「深まった交流」にならないと考えている。

今回の交流においてもB群の生徒が実際交流を経ることで，TV会議交流では解消できなかった不安を「楽しくやれた。またやりたいと思う」(6)，「むこうから話しかけてくれたので話しやすかった」(8)，「すごく楽しかった」(15)，「思ったよりみんなと話せた。とても楽しかった」(28)，「楽しかった。ほかの子とももっと交流したい」(29) 等の言葉でもって，交流を意義あるものへ昇華してくれた点にも注目したい。

(3) 交流学習におけるTV会議の効用

本研究は，実践センター「教育システム改革研究プロジェクト」の研究の一つとして取り組ませていただいた。本研究の中間発表あたる第七回の研究会の中で，美里中学校豊田氏からは，交流時の美里中学校生徒の様子と感想（P32）を，養護学校からは中学部生徒のTV会議の様子をビデオで紹介させていただき，その後本交流及び交流学習にネットワーク，特にTV会議システムを用いることについての研究協議を行った。その研究協議のまとめも兼ねて，交流学習においてTV会議システムを用いる効用の考察を試みたい。

TV会議を用いた交流の特性は(2)でも触れているが，映像・音声をリアルタイムに伝えることとお互いに相手の「言葉」「表情」「動き」をとらえながら，相互にコミュニケーションできることにある。

障害児との交流において初めての交流活動であれば，感想にもあったように様々な不安がつきまとうのは必然なことであろう。その不安や偏見等を交流以前に少しでも取り除くあるいは和らげるためにも障害に関する知識面での学習，交流する養護学校の様子等を知る「事前指導」が行われているが，自分が実際に交流する相手のイメージを抱くことは大変むずかしいことである。

不安を抱きながら直接会うことから始めるよりも，TV会議システムを用いることで周りに自

分の仲間がいる空間の中で，相手と出会う（テレビ画面を通して）ことの方がずっと楽に会うことができるのではないだろうか。しかもTV会議はバーチャルな世界ではあるが，「ほとんど会っている効果」があるメディアである。

それを示すように，実際交流では，両校生徒共に「はじめまして」を飛び越えた付き合いからスタートしたと両校の担任が報告をしてくれていた。

6．まとめ

意識調査の分析より「交流学習にネットワークを用いることにより，健常児の障害児に対する態度形成に何らかの影響を与える可能性がある」，と推測することができるであろう。また，感想より「TV会議で交流をしたことで，障害児と交流することの不安が解消された生徒」がいたこと大半の生徒がTV会議交流を楽しめたことから，「有効な事前交流となりえた」とおさえることができるであろう。「TV会議の効用」に関しては前述の通りの考察である。

ネットワーク交流に関して今後の課題は，より有効な交流とすべく，時期，時間，内容等を検討し計画に入れる必要がある。むろん，はじめからネットワーク交流ありき，ではなく，交流学習の計画の中での必然性を考慮し，コミュニケーションメディア（手紙，ファックス，電話，インターネット等）を選択するべきであろう。

ネットワーク交流に関する研究についての今後の課題は，今回の調査の再分析・検討を試みる必要と事例を積み上げていく必要がある。また，今回は健常児側のネットワーク交流学習の影響についての考察の試みであったが，障害児側のネットワーク交流学習の影響についての考察を試みる必要がある。この二点につては，今後本研究者が継続して研究を行うつもりである。

7．おわりに

本研究のおわりにあたって，調査に協力をいただいた美里町美里中学校一年生の生徒諸君，森本先生，豊田先生，プロジェクトの研究会で様々なご示唆・ご助言をいただいた実践センターの野中陽一先生はじめ「教育システム改革研究プロジェクト」のメンバー，本研究を進める上で様々な相談にのっていただいた附属養護学校の大谷博俊先生，TV会議システム（フェニックス）を貸与していただいたNTT和歌山に厚くお礼を申し上げます。

参考文献

遠藤　真・山口洋史（1969）：精神薄弱時に対する態度の研究，特殊教育学研究
伊藤隆二・田川元康（1967）：心身障害児に対する社会人の態度（偏見）に関する研究　特殊教育学研究
文部省（1988）：中学校学習指導要領
文部省（1999）：中学校学習指導要領
小栗　信（1997）：美里中学校との交流を通して　和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要
滋賀大学教育学部附属養護学校（1998）：チャレンジキッズダイジェスト

田川元康・由良妙子（1992）：障害児に対する小学生の態度形成，和歌山大学教育学部紀要